

さつまいも文化の豊かさを象徴する「いも美神像」

～制作の裏話から将来の繁栄を願って！～

川越いも友の会 事務局長 やまだ えいじ
山田 英次

1：はじめに ～なぜ、いも美神像を～

サツマイモで功績を残した人たちは、琉球に甘藷を導入した野國總管（沖縄県嘉手納町の野國總管宮）や、薩摩藩に伝えた前田利右衛門（鹿児島県指宿市の徳光神社）、関東地方では青木昆陽（千葉市幕張の昆陽神社）などが特に有名である。また各地方には、甘藷で飢餓を救ったとしてそれぞれの功績者の名前や伝承が残っている。

いずれも男性であり、甘藷の導入や普及に関わって功績を残したのだから、イモ神様などとして祀り感謝をすることは文化上、必要である。しかし、昔よりサツマイ

モの消費文化を大きく支え貢献したのは、主に女性である。おいも好きの女性がいなかったら、江戸の町での焼き芋ブームや、現代の彩り豊かなサツマイモスイーツのブームもなかったと考えられる。残念ながら、いままで女性をモチーフにしたおイモのシンボル像はなかった。

2：サツマイモ資料館にシンボルを

平成元年（1989）に、川越の「いも膳（昭和57年6月開店）」にサツマイモ資料館を設立するときに、何をどのように展示するか、かなり構想を練り具体的展示企画を考えた。その企画を任された私（山田）は、川越には、伝統あるおイモ文化を象徴するような上品なシンボルが必要と考えた。当時、川越地方は「川越いもと言えば紅赤」と言われる伝統品種の紅赤が栽培され、生産者もプライドを持って紅赤作りを競っていた。上質な紅赤づくりは、名人とも称される熟練した技術が必要で、紅赤を指してサツマイモの女王とも称した。その紅赤を発見したのは、北浦和の主婦・山田いちだった。

また、いも膳の代表的高级料理「いも懷石」（昭和61年秋より）を食べに来るお客の約9割は女性だった。さらにその当時より、サツマイモは美容食・健康食としても



いも美神像、現在は川越市立博物館に保管されている

見直されつつあった。

このようなことから「オイモを食べて、より美しく」という願いを込め、女性に縁のある「美人→美神→いも美神」と名付け、サツマイモ資料館の中心に配置する展示物として企画製作することとした。

3：制作の裏話 ～制作者：寺見章氏～

サツマイモ資料館の展示物の企画製作は約1年前（昭和63年春）からスタートしていたが、いも美神像の制作については、山田の知人であった寺見章氏（彫刻家：東京芸術大学大学院卒・昭和25年生れ）にお願いした。こちらから注文したことは、高さは130センチ（※サツマイモは「13」の数字に縁があるため）であることと、紅赤より誕生した女神であることだった。何回か協議を重ね、見本の試作品（43センチのFRP）を作っていただいてデザインを確定した。

その後、寺見氏はイタリア産大理石を取り寄せて朝霞の工房にて、精魂込めて制作され、サツマイモ資料館オープン前の1989年3月末に納品・安置していただいた。



制作者・寺見章氏（彫刻家）、30数年ぶりに自身の作品と再会した

納品後、寺見氏が、郷里の岡山へ居を移してしまったため、制作についての詳しい裏話を直接聞けなかったが、今年の8月、約30数年ぶりに川越へみえたので、いも美神像と再会してもらい、詳しい話を聞くことができた。

寺見氏によると、いも美神像のモデルと



いも美神の顔たちは、清楚な乙女風で親しみやすい



モデルとした京都・浄瑠璃寺にある吉祥天女立像（重要文化財）：ウキペディアより



いも美神像の試作品、サツマイモまんが資料館に展示されている

したのは、京都府・浄瑠璃寺の重要文化財「吉祥天女立像」であるという。東京芸大には、吉祥天像のレプリカがあり、それを何度も観てデザインを考えたという。確かに吉祥天の髪型や手の施無畏印、服装の雰囲気などが似ている。大理石は一度、鑿を入れる箇所を間違えるとすべてがダメになってしまうため、かなり緊張して祈るように制作に取り組み、最後は工房に泊まり込んで仕上げたという。出来上がった時には、自然と涙が出たともいう。

顔の表情は、あまり神仏風でなく、人間らしい清楚な乙女風にして、なるべく親しみ易くしたという。

吉祥天は幸福・美・富を顕す神であり、美人の代名詞と言われるので「いも美神」にふさわしい女神のモデルといえる。



いも美神像の制作依頼者・神山正久いも膳社長（中央）と山田（左）、寺見氏（右）

4：これからのサツマイモ文化の繁栄を願って…

サツマイモ資料館は平成20年（2008）6月に約20年間の営業を経て閉館し、展示物のほぼ総数は川越市立博物館へ寄贈された。いも美神像も同様に寄贈され、当初は博物館の受付カウンター脇に展示されていたが、数年前より応接室へ移された。このため、一般の来館者が直接観ることはできなくなってしまった。

サツマイモ文化を象徴する「いも美神像」は、川越だけの宝ではない。日本のサツマイモ文化を象徴する像であり、これからのイモ文化の繁栄と発展を願うシンボルともいえる。近いうちに、イモ関係者達の力でふさわしい場所に安置され、多くの一般市民やおイモファンの方々が、常時観ることが可能となることを願っている。